

---

桜

にゃこ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜

### 【Nコード】

N0851R

### 【作者名】

にゃこ

### 【あらすじ】

満開の桜に、月明かり。

共に暮らす桜守と宗弥の、夜桜の下酒を酌み交わす一夜のお話。

**（前書き）**

楽しんで頂けて幸いです。  
友人には砂が吐けると評判の作品です。

「 良い月だ」

長い髪を風に揺らし、少女は酒の入った杯をくいと傾け飲みほした。甘露、甘露、と呟いて、少女はわずかに口元を緩める。空には煌々と照る、わずかに欠けた月。頭上には見事に咲いた満開の桜。なんと美しい夜なのだろう、と少女は空を見上げた。

長く美しい黒髪に、小さな体躯。切れ長の瞳は穏やかで、まるで静かな湖面のよう。大きな合わない、丈の余る藍色の着流しを身に付けた少女は、片膝を立ててだらしなく草の上に座っていた。ふわりと、風が吹いた。

帯を軽く締めただけの着流しは、風を良く通す。涼やかな風は桜の花びらを散らすと共に、着流しの裾をわずかに揺らした。

ひらひら、ふわふわ。

淡く色づいた桜の花びらが一枚、酒杯の中に落ちた。少女はそれを見て風流なもんだねえと呟くと、小さな酒杯をべろりと舐め上げ、桜の花びらを飲み込んだ。

「ああ、美味だ、美味。美味いねえ」

春とは言え、夜はまだ肌寒い。にも関わらず、少女は寒さなど一切感じないように、ただ穏やかに微笑んでいた。微笑み、美しい夜にほうと息を吐く。

「しかしまあ、たったひとりの花見というのは、ちよいと寂しいもんだねえ」

大きな桜の幹に背を預け、思案するように少女は言う。そして、何か面白いはずを思いついた少年のように口角を上げ、酒を注いだ杯を再びくいと、空にした。

？

「宗弥殿」

少女は、主の元を訪れた。

静かに寝息を立てるその人の肩を揺らし、名前を呼ぶ。

「起きろ、宗弥殿。桜守は相手が欲しいのだ」

「……ん」

小さく呻いたその声を聞き洩らすことなく、桜守はその身体を更に激しく揺すった。

「起きろ！ 今宵はこんなにも美しいのに、ひとりで遊べと言っのか！」

「……揺らすな」

早く起きると、思い切り身体をゆすつてやると、宗弥は分かったからと言って気だるげに身体を起こした。

短く刈り込まれた黒髪に、眠たげに細められた瞳。形の良い眉を歪め、宗弥は桜守を睨みつけた。そして、寝乱れた浴衣を直しながら口を開く。

「桜守、それは私の着物じゃないか」

「ああ。何か問題でも？」

宗弥ははあと深い溜め息を吐くと、桜守の手をくいと引いて傍に立たせた。そして、土で汚れた着物の裾や臀部を軽くはたきながら、この娘どうしてくれよう、などと考える。

「全く、これは一番気に入っているものの……。お前、これで地面に座り込んだらう」

「桜守は宗弥殿の物であり、宗弥殿は桜守の物なのだ。宗弥殿が桜守の物だとすれば、宗弥殿の物だって、桜守の物になるということだ」

反省するような素振りは見せず、当たり前だろつとも言うように桜守は笑って言った。

「随分と傲慢な理論だ。私はそんなふうに育てた覚えなどないのだから」

「何を言うか、宗弥殿。つまりは桜守も、桜守の物も宗弥殿の物になるということなのに。」

それに、これは桜守が百年の歳月をかけて創った人格なのだ。五年やそこら養われたくらいじゃ変わりはせぬよ」

分かったか小僧、と桜守は宗弥の頭をぐりと小突いた。

「……百年？ もうそんなになるのか」

「ああ、もう百年だ。百年目の桜など、なかなか見れるものではないぞ？ だから早く、桜守の相手をしておくれ。それに、折角宗弥殿の好きな酒と肴を用意したのだ、宗弥殿が来てくれなければ無駄になってしまうではないか」

いたずらっ子のように宗弥の手を引くその様はまだ幼く、愛らしい。この少女が百年の時を生きているなど、一体誰が信じられるだろうか。

「今宵の桜はそんなに美しいかい？」

「美しいとも」

「それに、もう百年にもなると？」

「ああ、見事に咲き誇っておるよ」

「ならば一度、拝んでおかねばなるまいな」

相手は人ならざる者、仕方がない、と宗弥はゆっくりと立ち上がった。

### 主殿。

初めて出会ったのは、長く日照りの続いた暑い日だった。少女の小さな口から零れた声がわずかに震えていたのを、良く覚えている。五年前、この家に移り住むことになった宗弥の前に現れた、ひとりの少女。小汚く、みすばらしく、孤児でも迷い込んだのかと思わせるような風貌で、少女は主殿と一言、宗弥を呼んだ。

水を、分けてもらえないだろうか。喉が渴いて、死にそうなのだ。

言われ、腕に水を入れて与えたが、少女は違う、違うと言って受取るうとはしなかった。どういう事かと思案すれば、少女は涙ながらに訴えるのだ。宗弥の腕に縋りつき、どうかお願いだから、後生だから、と。

早く、早くしないと枯れてしまう。

一筋の涙を流し、霞のように姿を消した。あれは、一体なんだっただろう。夢か、幻か。けれど腕に触れたあの冷たさは、確かな質感を伴っていて、宗弥は少女の触れた場所をそっと自分で撫でてみた。

……あれはきっと、人では無い者。

そして水を欲し、枯れてしまうと嘆く者。

宗弥はしばし思案し、枯れかけた庭の桜に水を与えた。辺りに生える雑草を抜き、肥料を与え、水を与え、二週間ほどが経った頃、再び、少女は姿を現した。

美味い水を有難う、主殿。

以前とは見違えるほどに美しく、愛らしい少女。彼女は宗弥の足許に跪き、こう言った。

本日より私はそなたの僕だ。これより永久に、そなたと、この家を守り続けよう。

そして、につこりと笑ってこう続けたのだ。

だから存分に、私に仕えろと良い。

とんでもない拾いものをしてしまったと、そう思った。しかし、今ではもうこの我儘娘が居なくてはどうにも落ち着かない。

「宗弥殿！ 何をもたもたしておるのだ！ 早くせねば夜が開けてしまうではないか！」

満開の桜が、月明かりに照らされていた。淡く、白く色付いた桜は、時折風に吹かれて花びらを幾つか散らし、ざわざわと揺れ、軽やかに歌う。

辻ヶ花 極楽に咲く花とはきつとこのことなのだろう、と宗弥はわずかに目を細めた。

「どうだ、宗弥殿。見事なものだろう」

「ああ、見事だ」

「……これで着物の事は不問にしてくれるか？」

上目遣いに言われたその台詞に、宗弥は思わず笑ってしまった。

傲慢な事を言いながら、その実、とても気に掛かっていたのだろう。優しい子だ。心配そうに宗弥の顔を覗きこむ桜守の姿は小さな子どものようで、実に微笑ましい。

「もとより怒ってなどおらぬ」

「本当か？」

「お前に嘘を吐いた事などありませんよ」

「本当だな？」

「ああ、もちろん」

満開の桜にも負けない様な晴れやかな笑みを浮かべ、桜守は宗弥に抱きついた。小さな手が、その微笑みが、とても愛おしかった。

「桜守は嬉しい。宗弥殿と共に過ごせるこの日々が、とても幸せだ」

「私もだよ、桜守。さあ、これから花見をするのだろうか？ 私に酌をしてくれ」

「おう」

桜の木の根元に二人で座り、桜を愛で、月を眺め、共に酒を酌み交わした。

宗弥殿、私には名がないのだ。

悲しげに紡がれた少女の言葉に、宗弥はわずかに眉を寄せた。

私に、名をくれないか。

少女は今まで、誰にも名を呼ばれた事がないのだと言う。名を呼び合い、誰かと笑い合った事もないのだと言う。あまりにも悲痛なその響きに、宗弥はその小さな体躯を抱きしめ、何よりも美しい名



を与えようと、約束をした。愛らしい少女にふさわしい、可憐で優美な名前を。

長く目を瞑り、宗弥は、少女に『桜守』と名付けた。

美しい桜。

優しい守人。

桜守という、宗弥が飛び切り美しいと思う名を与えた。

桜守は笑った。

ようやく、名を与えられた。

以来、桜守は自身の事を『桜守』と呼ぶようになった。愛しい人と呼び合うことのできる名をようやく持てたと言って、微笑みの瞳からひとつ零した涙は、まるで真珠のように清らかだった。

「ああ、今宵は真、美しいなあ」

「だろう？ どうしても、宗弥殿と見たかったのだ」

「そうか、有難う」

くしゃりと髪を撫でてやると、桜守はくすぐったそうにくすぐす

と声を漏らした。あれ以来、真珠の涙は見えていない。

「なあ宗弥殿」

「ん？」

「桜守はあの時……名を与えられた時、初めて存在を認められたのだ」

目を伏せ、桜守は言った。

「幸せすぎてなあ、今なら死んでも良いとすら思える」

そのほほ笑みは、まるで散り際の桜。何か侘しさを伴う美しさをその身に湛え、少女は微笑み呟いた。

「それは困った。私の幸せはもう、お前と共に在るというのに」

言っと、桜守はころりと横になり、宗弥の膝に頭を預けた。暖かいなあと呟いて、桜守は手を伸ばし、細い指先で宗弥の頬にそつと触れる。ひんやりとした体温が心地良い。

「ならば宗弥殿。来年もまた、桜守と共に花見をしてくれるか？」

「おや、来年だけで良いのかい？」

「では、その次の年も」

宗弥はふふと楽しげに笑うと、頬に添えられている桜守の手に自分の手を重ね、小さな手のひらにひとつ口付けをした。そして、もう一方の手で桜守の柔らかな髪を撫でて微笑んだ。優しい手付きで、艶やかな黒髪をそつと梳いた。

「一年二年と言わず、ずっとそばに居ておくれよ。言っただろう？」

私の幸せは、お前と共に在るのだと」

「そうか。……ならば、祈ろう」

幸せそうに、桜守は目を閉じた。そして、空に呟く。

「この幸せが、限りなく、終わり無きこの空のように続く事を」

宗弥も目を閉じ、桜守と共に祈りを捧げた。

この美しい日々が、永久に続く事を。

そして、祈りと共に空に誓った。

この傲慢で優しい小さな僕を、永遠に、守り続けていく事を。

？

ひらひらと散る桜の花びらに、宗弥はひとつ、息を吐いた。

桜の寿命は約六十年。しかし、環境によつては千年もの時を生きるという。

ああ、せめて、自分が死ぬその時までには生きていて欲しいと  
そう願うのは、それは私の傲慢だろうか。

心中で呟き、宗弥は愛しい少女を静かに、見つめていた。

了



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0851r/>

---

桜

2011年4月28日12時25分発行